

～ 輝 きの 子 育 て ～

日 本 の 人 口 問 題

朝鮮半島が火薬庫になりつつある。もし北朝鮮有事となれば、戦場となるのは韓国と日本である。北朝鮮の核、ミサイルに対し日本は軍事的対応をせざるを得ないと思う。座して、死を待つ、我慢するという選択肢はない。あってはならないことだが、万一の場合の覚悟が求められている。この危機を契機に、自分の国は自分で守るという気概を持つために、憲法改正問題も含め、真剣に論議すべき時ではないかと思います。

この安全保障上の危機の他に、日本の危機は人口問題です。

国立社会保障・人口問題研究所が「将来推計人口」公表した。合計特殊出生率と平均寿命を使って推計している。この推計はかなりの精度で当たる数値です。

平均寿命 男：84.94年 女：91.35
出生率 1.44

人口推計	2015年	1億2,709万人	2020年	1億2,532万人
	2030年	1億1,912万人	2040年	1億1,901万人
	2050年	1億 192万人	2060年	9,284万人
	2065年	8,807万人		
	(2017年は1億2,653万人)			

2015年から5年後の2020年で177万人の減少です。北海道札幌市196万人、福岡県福岡市155万人、兵庫県神戸市153万人（東京都大田区 71.64万人）

今後5年毎に県庁所在地クラスの都市が消えてゆくことになります。大田区2区分です。

これは、もはや変更出来ない確実な未来です。

人口の年代別構成比。(2017年を100人とする)48年後は70人です。

	2017年	48年後 →	2065年
0～14歳	12人		7人
15～64歳	60人		36人
65歳以上	28人		27人
計	100人		70人

65歳以上の人は1人しか減っていないのに、15～64歳の人（生産年齢人口）は24人（40%）も減っています。いかに働き手を確保するかが喫緊の課題です。

現在いくつかの対応策が検討されています。

外国人の受け入れ、技術や専門性の高度化による生産性の向上、女性や高齢者の雇用環境の整備、人工知能（AI）で注目される情報技術（IT）の開発と実用化です。

この中で、長い間、私が携わってきたIT関連の人工知能（AI）について考えてみたい。日本のIT業界（特に大企業）は、AIに関し世界の流れから周回遅れているが、期待せざるを得ない分野です。（最近では世界の先端に追いつきつつありますが。）

囲碁、将棋の世界では既にプロの人達と互角の力を出している。自動車の自動運転、医療分野での画像による病気の診断は実用化直前である。生産現場でのロボットの活躍は、より高度化しており、介護、受付、建設、監視分野でも、高度な活用が期待されるまでになっている。翻訳も専門分野では実用化されている。

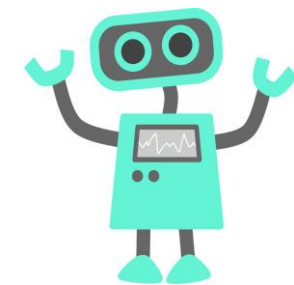
何故、人工知能がここに来て急激に発達してきたかといえば、従来の計算能力に優れたコンピュータが、人間と同じように「眼（センサー）」を持ったことによる。大量のデータ（ビッグデータ）を眼で読み、蓄積し、超高速の計算能力を使って学習するようになったこと（ディープラーニング）で革命を起こしている。これを第四次産業革命と呼ぶ人もいる。

この革命は大いに期待も出来るが、大きな問題も抱えている。

一つは、IT技術に携わる人材不足です。少子化の影響で人材の供給が大きく低下することです。

二つ目は人工知能（AI）搭載のロボットや機械によって今の仕事なくなる職業が出てくることです。技術の進歩で人が職を失うことは今に始まったことではありませんが、人工知能の発達では20年後には労働人口の半分以上がロボットに代るという試算があるほどです。

「マニュアル化しやすい仕事」「同一ルーチンの仕事を繰り返す業務」はロボットに代替されやすいといわれます。人口は減る。老人は減らずに働き手が減る。働き手として人口知能（AI）が活躍する。その裏には、IT技術者は不足するが、今、携わっている仕事はなくなるかも知れない。こういう世界が近々訪れることは、ほぼ確実です。どう生きるかを考える必要が迫っています。



片野 英司